せよ、独自性が勝っている。全体の構成もよい。解説を読むと独自の作法に拠っているらしいが、今日、作曲家が自らを表現するためには、このことは作曲の基本と言えるだろう。

ACLは、興味深い音楽祭であるが、25日は、宣伝の問題なのか、通常より聴衆が少なかったことが残念だ。

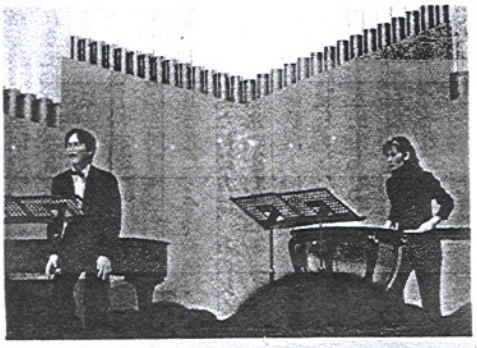
中央対周縁の図式を無化するスタンツ

久保 禎

今回で5回目となる「ACL／ISCMの夕べ」は、ACLより台湾、ISCMよりルーマニア、また、JFCからは九五年度ACLバンコク大会に参加した新進気鋭の作曲家、そして、アジアとの交流を積極的に展開している九州作曲家協会々員の作品で構成された。台湾からの2推薦作品を含む第一夜は、事務局側の各方面への働き掛けにもかかわらず、五十名程の淋しい入りとなったが、演奏者の各作品に寄せる熱意と聴衆の真摯で暖かさに満ちた聴取とが、この会を充実したものにしてくれたように思う。

ユニークかつ個性溢れる創作活動で注目され、クラーニッヒシュタイン音楽賞や芥川作曲賞など内外での評価も高い川島素晴さんの「発声者と打楽器のための〈2つのインベンション〉」で開幕。それぞれI「〈音節→単語〉と〈音高→旋律〉の連関」、II「音色と表意の可能性」と題された作品は、問題の所在並びに使用テキストの徹底した限定によって、看過されがちな日本語と音楽構造との関係性を、より根源的な次元から照射してみせた。発声は作曲者自らが担当。晦渋から笑いまでの振幅の大きさが、独自の問題提起を説得力あるものにしていた。

大学在学中から国内外で活発に作品を発表し続けている堰合聡さんの「クァルテット3＋1」は、オーボエ・クラリネット・ヴァイオリン対ピアノという二項対立の構図が、個と集団の意志形成作用をアイロニカルに象徴。調和を希求するピアノが孤軍奮闘しつつも次第にキレて手がつけられなくなっていく様は、この所表面化してきた「キレる」や「学級崩壊」の先駆的な予兆として興味深く聴けた。演劇性や諧謔性が要求されるピアノを前出の川島さんが体を張って熱演したが、客層が違えば、場内爆笑は必至。



川島素晴氏の自作自演、打楽器は神田佳子さん

3曲目は、川島・堰合さんと同世代の若手女流作曲家・鄭玉雲さんの「フルート、オーボエ、クラリネット、チェロ、コントラバスのための五重奏」。全体は曲趣の異なる4つの楽章で構成され、伝統（西洋的な意味合いにおける）と非伝統とを等価的に混在させることによって、端正な中にも色彩感豊かな音像を立ち上がらせていた。瑞々しい感受性がとりわけ印象に残った。

休憩後は、まず九州作曲家協会から掘作「往還歌」がクラリネット谷口玄徳さん、打楽器神田佳子さんによって紹介された。東アジア的音楽思考が優位なこの作品には随所で特殊技法や即興性・偶発性が要求されるが、気鋭のおふたりは、卓越した技巧によって、作品以上の緊迫感や躍動性を引き出してくださった。

第一夜最後は、「世界音楽の日々」など世界各国の音楽祭で度々作品が取り上げられている鍾耀光さんの「驚濤裂岸・捲起千堆雪（弦楽四重奏版）」。中国の陰陽哲学と西洋の集合論・延長理論を融合・援用した氏独自の作曲システムに基づくという。宋の詩人蘇軾から引かれたタイトルは、標題性よりもむしろ構造を規定しているように思われ、深遠広大な宇宙の有り様を、単一原理に基づきながら、繊細かつダイナミックに描出しているかのように聴いた。

国際交流が得てして対欧米中心に展開されがちな音楽界にあって、この演奏会は中央対周縁といった図式を無化するスタンスに立つ。音楽祭の整理・縮小、専門誌の休刊、輸入CDの入荷不足など現代の音楽を取り巻く情況が厳しさを増す中、この会の持つ意義は今後一層高まるものと思われる。会員無料の好企画に、外くの皆さんが足を運ばれるよう、切にお願いしたいと思います。

ルーマニア作品に感じた根底に流れる民族の血の違い

尾崎敏之

"ACL／ISCMの夕べ V" 第二夜は11月26日（木）前夜と同じくすみだトリフォニー小ホールで行われました。この日はISCMよりルーマニアの三人の作曲家、Doina ROTARU女史（当日参加。アルトフルートの為のドール）、Libiu DANCEANU氏（オーボエとシンセサイザーの為のコンツェルティーノ シントーボエOp.53）とOctavian NEMESCU氏（真夜中の為の弦楽四重奏曲）の作品が演奏されました。JFCからは1995年度ACLバンコク大会に参加された新進気鋭の若手、米倉香織さんのクラ